

チャペル フックレット No.21

「福田敬太郎 — 神に向き合った生涯」

小野静雄



名古屋学院大学 宗教部

「福田敬太郎 — 神に向き合った生涯」

小野 静雄

おの しずお
小野 静雄

日本キリスト改革派教会牧師
1947年生まれ。
伝道者として40年余りを歩む。

著作

『日本プロテスタント教会史』上下巻
『日本キリスト改革派教会史』など

【はじめに】

おはようございます。ご紹介いただきました小野と申します。今回、私がお願いを受けましたのは、名古屋学院大学の初代の学長でいらっしゃいます福田敬太郎という方について、とりわけキリスト教信仰の、キリスト者として福田敬太郎がどういう偉業をなされたのか、そういう観点から話してみなさいということなのであろうと思います。¹元々、私が伺ったときは、ほかのどなたかを紹介するつもりで、私もお話をお受けしたのですが、なにぶん、先生の略歴でも分かりますように、1980年に亡くなって以来、もう37年になるわけでありまして。ですから、福田先生をキリスト者という側面から熟知していらっしゃる方々、ずいぶん昔はたくさんおられたわけですが、今はほとんどおられません。あの方、この方を…と、頭の中でいろいろな方々の姿を思い浮かべましたが、結局、お元気で、この場所で皆さんにお話しただけ、そういう健康の状態の方がほとんどいらっしゃらないわけです。

福田先生は、私が属しています「日本キリスト改革派教会」という教会の「神港教会」（神戸市）で「長老」という役員をしていらっしゃったわけですね。長老の務めについても後でお話しをいたしますが、1929年に神港教会の長老に選出されて、そして亡くなるまで、現職で50年ですね、半世紀にわたって長老という役職をお勤めになったわけでありまして。この福田先生の長老としての長いお働き、これについても、皆さんにご紹介・ご説明できる、そういう方々がほとんどいらっしゃらない。そんなわけで、先生について語る資格は私にはほとんど無いんですけども、お受けした次第であります。

名古屋学院大学の初代の学長さんが「福田敬太郎」という方であるということは、学生の皆さんはどの程度知っていらっしゃるのでしょうか。今日の私の話を聞いていただいて、少なくともこの「福田敬太郎」という、これが、われら大学の初代学長なんだという、このお名前を、ぜひ心に刻んで、そしてじゃあ福田敬太郎とは何者だということに幾らかでも関心を持

っていただければ、それで私の今回の仕事は終わるように思っております。

福田敬太郎が歩んだキリスト者の道

私は、神戸にある私たちの教会が経営する神学校、「神戸改革派神学校」というのですが、そこで3年半学びました。1969年から72年までです。その間、2年間、神学校のすぐ近くにある「神港教会」という教会に、神学生として派遣されたわけです。神学生は、いろんな教会に派遣されてきて、特に日曜日には、教会での牧師さんの働きぶりというものを見せていただくわけですね。幾らかは教会のお手伝いもする…と、これが神学生の日曜日の暮らしなんです。1970年ですから、すでに福田先生は74歳になってらっしゃった…、そしてすでに名古屋学院大学の学長を務めていらっしゃるわけです。しかし、先生は名古屋でお仕事をされながら、よほどの事情がない限り、土曜・日曜には神戸にお帰りになって、そして神港教会での長老としての、クリスチャンとしての生活を、終生忠実に続けられた方です。

およそ2年間、日曜日ごとには、先生の風貌に接したわけでありませうけれども、相手は、やはり大変高名な方ですので、一神学生が気軽にお話を交わすというのは、ほとんどなかったように思います。しかし未だに先生の研究対象であった、大経済学者シュンペーターという発音は忘れません。この一週間ずっと、ありありと私の耳にもう一度よみがえってきて、先生としてはシュンペーターという方を通して、世界の経済のあるいは経済学の動向というものをしっかりと見てらっしゃったということ、思うわけです。

先生は神戸大学から学長をされ、そして任期が終わってから、名古屋学院大学の学長に招聘されたわけですが、しかし先生の普段のご様子は、けっして偉ぶった気配、人を近寄らせないという、そういう支配的な地位などを表に出して、人と接しられると、そういう気配は微塵もありませんでした。いつも温厚なですね、笑顔で接してくださいました。先生はご自分のことを、若いころ自己紹介なさる際に「私の名は『フクダケダロー』」とジョークを飛ばされた、というんですね。直接聞いたことは無いんですが、「フクだけだろう」というんですね。「フク」というのは今はほとんど使われませんが、つまり「法螺」ですね、あるいは「中身もないのに偉そうな物言いをする」とか、そういう意味合いなんだそうですね。

しかしもちろん、実際の先生の生き様というのは、けっして「フクだけ」

の人物ではなかったわけです。神戸大学の学長をなさっていた時代、いわゆる60年安保、1960年の安保条約の改訂という出来事がありました。60年の安保というのは、学生だけじゃなくて、市民も広範囲に巻き込んだ、いわゆる安保の改訂に反対する国民的な闘争があったわけです。70年安保は学生紛争という色合いが徹底的に強いのですが、60年というのはそうじゃなかったわけですね。もちろん、それぞれの学園・大学でも紛争がありまして、神戸大学でも学園紛争があったわけですね。学生たちが福田学長を取り囲んで、先生は身動きができなくなった。そしてやむを得ず、警察が導入されたそうです。その時に、10人余りの学生が、警察に検挙される・留置されると、そういう事件が、神戸大学の歴史にとっても非常に重大な歴史であったと思うのです。福田先生はただちに警察に出かけて、学生の釈放を強硬に警察に主張いたしまして、ついに全員の釈放にこぎつけたと、そういうような出来事がありました。私などの記憶には、穏やかな笑顔しか残っていないわけですが、しかし先生にはそうした毅然とした、気骨のある教育者という、もう一つの顔が確かにあったというように思われるわけですね。

少し先生の個人史という部分に触れますが、お手元の年譜・履歴のところに、1901年10月20日という日にちを書いていますね。1901年、そこに日本基督教会・高槻講義所で、パンフォルン宣教師より受洗をしたというように書かれています。つまりこれは満5歳で洗礼を受けてらっしゃるということですね。まだわけも分からない5歳の少年が洗礼を受けるというわけで、これはやっぱり先生が属してらっしゃった日本基督教会という教会の独自の伝統に立つものでありました。

日本基督教会は、プロテスタント教会の中で、明治以来最も大きな所帯を持つ教会であったわけですが、その日本基督教会では、キリスト者の家庭に生まれた子どもたちに、幼い時代に洗礼を施す、そういう伝統がありました。まだ本人には信仰は無いんですけれども、しかし、神の約束がその家庭の上にある限りは、そこに生まれた子どももまた神の約束のもとにあるのだ、こういう理解ですね。通常は生まれて1年ぐらい、いわゆる「幼児洗礼(小児洗礼)」というのですが、福田先生は5歳で洗礼をお受けになっていらっしゃるわけです。幼児洗礼というのは、幼い時代から家庭でもあるいは教会でも、君は神の教えを受けて生きなさい、あるいは、神の愛の中を歩もうではないか、そのように教られながら成長する、これが幼児洗礼ということの意味ですね。

そして、やがて15歳から20歳ぐらいになりますと、自分で生き方・人生・信仰というものを自覚的に考えることができる、そういう年齢になります。福田先生の場合は、1913年に、日本基督教会茨木伝道教会で、信仰告白をされた。これは別の表現では「堅信礼」、いわゆるルター派教会とか、あるいは聖公会などでは、「堅信礼」という表現を使うということですが、福田先生の場合は、1913年ですから年齢でいうと、17歳でしょうか。その時にすでに自覚的にキリスト者としての人生を選び取っている。いわば、順調に、信仰の道を歩んでいらっしゃる様子が伺えます。年譜、履歴、そういったものを振り返る限り、キリスト教信仰に深い迷いとか悩みをお感じになったということが、少なくとも見られないわけですね。そうして、ゆるぎない確信でキリスト教を信じて生涯を全うされた、そのように想像することができるわけです。

先生は、お勤めの関係でしょう、1918年にはですね、神戸の神港教会というところに籍を移していらっしゃいます。そして、その3年後、1921年（大正10年）に神港教会の日曜学校の校長さんに任命されていらっしゃるわけですね。「日曜学校」、いまは日曜学校に通う子どもたちが極端に少なくなって、どの教会の日曜学校も大変に淋しい。私などがまだ神学生であった1970年は、どの教会も、大勢の子どもたちが日曜日の朝集まって、聖書を開き讃美歌を歌い、そして何かご褒美を少しいただいて帰る、そういう過ごし方をしていたと思います。日曜日、勝手に遊ばせておくよりは、当時は塾などはまだありませんでしたから、日曜学校に子どもを送っておけば、それなりに良いことを学んでくるだろう。そのように多くの家庭の親御さんたちが考えていらっしゃった、そういう時代です。

日曜学校の教師、あるいは校長になるということは、これはやっぱり、まずは教師自身が率直な、温かい信仰を持っていることが非常に重要な要因になるわけですね。日曜学校というのは、知識を切り売りする、聖書の知識を切り売りするという、そういう場所ではありません。人間の命と人生というのは、神の導きの中にあるということを繰り返し学ぶのです。神の教えに従って正直に、あるいは勇気を抱いて君の人生を生きて行きなさい、ということ聖書から学ぶわけです。そして、神と人を尊敬して、(先ほどご紹介の言葉にもありましたけれども)自立した、自由な人間として歩もう、と。イエス・キリストは、「光の子どもとして歩みなさい」ということを言われました。あるいは、「世の光、地の塩として生きる、

それがあなたの人生ではないか」と、こういうことを呼びかけるわけです。あるいはイエスのたとえの中に、「砂の上に家を建てる、そういう人生ではなくて、しっかりした堅固な土台の上に、我々の人生という家を建てようじゃないか」、こういう「光の子」であったり「世の光」であったり、堅固な土台の上に人生というものを築こう、こういうことを幼い子どもたちに伝えるのが日曜学校であるわけですね。福田先生は、1945年、敗戦の年まで、日曜学校の校長を務められ、既に大学で教授の職も果たしていらっしゃいましたから、どれほど多忙であったかというように思うんですね。

次に「長老」という仕事、その長老として50年務められたということがどういう意味合いを持っていたか、ということをお話をします。先生が洗礼を受けてキリスト者になられた、先ほど申し上げた日本基督教会、これは教会の中に「牧師」という務めと並んで、「長老」という役員、複数の役員を定めるというのがこの教会の伝統でありますね。今も同じであります。太平洋戦争の開戦時には、福田先生は「日本基督改革派教会」という教会に属されたわけですが、その場合もやはり長老という務めが、非常に重要な意味合いを持っていたわけですね。長老というのは、通常3名以上、複数の長老が立てられる。そして牧師と共同で教会の運営にあたる、これが長老の働きです。教会の規模によっては、10名ほど、2017年の神港教会では11名の長老が、牧師さんと共同で教会の運営にあたっていらっしゃるわけですね。

つまり、教会を牧師というただ一人の人間の指導に任せないということですね。単独で牧師が教会の指導をする、そこにも、一つの長所があるとは思いますが、しかし一人だけに任せておく危険性も、もちろん必ず生じてくるわけにありますね。やっぱり教会という共同体が、どういうリーダーシップで運営されているのか、これが本来の中心であるわけです。いろんな教会運営の在り方がそこから生まれてまいりました。「日本基督教会」、あるいは「日本キリスト改革派教会」の場合には、「長老制度」あるいは「長老主義」、そういう方法で、教会を運営するわけです。

おおまかな話になりますけれども、一人の指導者が、教会全体の指導をする、つまり、上からの指導を徹底させるという、レジュメに書きました「監督主義」という、これが、一人の監督・指導者によって、教会をトップダウンで指導していく・運営していくやり方ですね。そのちょうど対照的な方法に、「会衆制」というものがあります。この場合には、全ての信徒、(牧師も含めて)すべての共同体の成員が、同じ責任と同じ権限をもって、

教会を運営する、そういう仕方ですね。これが「監督制」と「会衆制」。たとえば、同志社を起こした新島襄のような人は、アメリカ留学中に、いわゆる「会衆主義」という、すべての教会員が平等で教会を形作っていくという、こういう在り方の重要性を、新島襄などは学びまして、そこから、生まれてきた教会のことを「組合教会」と呼ぶわけですね。この二つの方式のちょうど中間あたりに「長老制」という、教会の運営の在り方が据えられているわけですね。そういう3つの制度があります。

この点で、名古屋学院の最初の礎を据えたフレデリック・クラインという宣教師。この方は、アメリカの、プロテスタント・メソジスト教会の出身であったわけですね。「アメリカ・プロテスタント・メソジスト」という教会は、メソジストの監督教会から独立して生まれた新しい教会で、その宣教師がクライン宣教師であったわけですね。このメソジスト教会が独立した理由は、監督教会がいわゆる牧師主導であり、いわゆるトップダウンの教会指導になっている。そのために、信徒が教会の運営に関わることができない、場合によっては信徒が排除されていく、そのことに対する批判というものを抱かれて、そういった中から、監督教会から独立した新たなメソジスト教会が設立された。そういう教会から、クライン宣教師は派遣されていたわけですね。

さて、長老という仕事は、教会員の中から選挙されて選ばれるものですね。もちろん人気投票ではありませんし、社会的な地位が高いから長老に選ばれる、そういうものでももちろんないんですね。やっぱり、堅実な信仰をもって、教会の指導運営にしっかりと責任を負うことができる、そういう人物であります。何よりも、長老主義という考え方は「会議」というものを非常に重視するのでありますね。会議を通して教会の運営を作り出す、コンセンサスを生み出していき、そういう手法を教会の運営の一番根幹に据えている、これが長老主義という教会の在り方ですね。会議、これはもちろん、会議に出席する人たを説得する能力が問われるわけです。しかし説得するといっても、自分の意見を押し通すわけではなくて、同時に説得されることも重要であるわけです。説得し説得される。そういう能力が、風通しの良い会議を作るんだと思うんですね。こうして、優れた見識を持つ長老が牧師と協力を、そういう体制が出来上がっていけば、教会という集まりも決して閉鎖的なものではなくて、風通しの良いものに必ずなっていくわけですね。

牧師というのは一つの職業ですので、いったん牧師になれば、よほど不

都合がなければ、生涯牧師を続ける。多くの教会が定年制をとっていますから、(私も70で牧師を定年になったわけですが)一方で長老というのは、だいたい2年か3年ごとに改選されるんですね。一度長老になったら、生涯長老だと、そういうものではありませんで、会議による再選挙を経て、もう一度また長老に選ばれるというわけでありまして。福田敬太郎という方は、亡くなるまでの50年間、ずっと継続して長老をお続けになりました。つまり、教会の方々の信頼が非常に厚くて、あるいは人望の厚いそういう方であったことは、これから見ても明らかですね。

福田先生は、ご自宅でこれも恐らく40年50年の間、「家庭集会」というものを開いておられました。家庭集会、つまりこれはご自分の家屋、家庭を開放して、そして近隣の方を招いたり、あるいは近くにいる同信の仲間たちを迎え入れたり、そのようにして自分の家庭をキリスト教の集いの場所とする、そういう考え方ですね。つまりこれは、一つの家庭そのものが開放的でなければ、家庭集会というものは開くことができないわけですね。そして、福田先生が、ほとんど晩年に至るまで、家庭集会を開き続ける、それはやっぱり、伝道という、伝道をしよう、キリスト教というものを広く分かち合われる、そういう信仰にしたい、こういうお気持ち・決意というものの表れであろうというように思われます。つまり、信仰というのは、自分の心の中だけの問題ではなくて、広く分かち合われる、そのような機会を先生は自ら実践なさったわけですね。

先生ご自身が1年間に、十数回、家庭集会で聖書の解き明かしをなさった、そういう記録もあります。金曜日まで名古屋学院でお勤めになって、そして土・日、神戸に帰ってきて、そしてその土曜日には、ご自宅で家庭集会を開く、と。名古屋学院大学に赴任されたのが68歳ということですから、気力も体力も使役されて、非常な努力をなさって、この家庭集会というものをお続けになったというように思います。聖書を教えるために、あるいは長老としての勤めを果たすためにも、先生はキリスト教そのものを非常に熱心に学習をなさった、ということが伝えられていますね。経済学者として大きなお仕事をなさり、その一方で、聖書を学ぶという点でも、真摯な研究、研鑽が続けられた。太平洋戦争が始まる直前の頃に、属していらした教会の牧師が長い病気になられた。その時に長老として日曜日の説教を担当しなければならぬ、そういうことがしばらく続いて、その頃に、福田先生は、日本基督教団のですね、「教師試補」というライセンスを取るために、集中的に勉強なさったということが伝えられています。教師試補というのは、牧師さんになる準備、あるいはその一歩手前

のライセンスですね。もちろん学問の道を捨てるというおつもりはないわけですが、しかし、牧師に代わって聖書のお話をする、その点でも、いい加減ではなくて、すごく専門的な知識を身に着けて、聖書を解き明かしたという、そのように思われた。まあ、とにかく先生はなさることなんでもそうですけれども、中途半端な思い付きで始めたり、終わったりなさる方ではなかったということですね。

この集中力というのは、先生の生涯の一つの特色だと思うんですが、福田先生は、小学校以来ですね、一日たりとも欠かさず日記を書いた。毎日毎日、日記をお付けになりました。ただ残念なことに、1945年、昭和20年の3月の神戸空襲で、それまで書き溜められた日記も様々な書籍も、ご自宅が全焼したわけでありまして、日記は失われたんですね。しかし先生は、もうその日からただちに日記を書きついでいらっしゃるわけです。神港教会という大きな教会の歴史を書き起こすときに、福田先生のいわゆる「福田日記」と呼ばれるものが、非常に重要な歴史的な価値を持った、ということももう明らかでありますね。ちなみに、福田日記の最後のページ、これは、1979年の11月14日、これが最後の記述で、その2か月後にはお亡くなりになった。病が重くなってですね。14日の日記にこうあります。「チャペル（名古屋学院大学のチャペル）を断る電話をかけ、終日静養」。もう身動きができなくなって、チャペルに行くこともできない、その断りの電話をかけて、終日、静養したと。その2か月後、年明けの1月5日、先生は亡くなられたわけでありましてね。

福田先生の長老としての歩みを振り返って、やはり最も注目されるのは、太平洋戦争敗戦直後の時代ですね。神港教会という教会も、戦災のために教会堂が全焼してしまうのです。神港教会では、1940年（昭和15年）、太平洋戦争の直前でありまして、田中剛二という牧師を迎えて、新たな体制で伝道を始められています。田中剛二という方は、いわば、福田敬太郎先生と見事な連携を組んで、戦中・戦後の神港教会を指導した、あるいは、神戸改革派神学校の再建にも取り組まれた指導者であります。田中先生は、日本におけるキリスト教説教の歴史の中で屈指の、非常に優れた説教者であって、かつまた、宗教改革の研究者としても、とりわけカルヴァンの研究者としても、名を知られた方であったわけですね。私なども、神学校では宗教改革史などを田中先生から指導を受け、日曜日には先生の礼拝説教を聞き、そして非常に感銘を受けた、そういう世代に属するわけです。

福田先生は、田中牧師よりも3歳年長でありまして、でもほとんど同世

代ですね、福田長老と田中牧師、この二人の協力関係というのはですね、友情といってもいいような、そういう関係は、我々の教会の中でも非常に際立っていたように思います。およそ彼らは40年、一糸乱れない、非常に強力な信頼関係を築きました。福田先生の方では、田中牧師の伝道者としての熱意を敬愛し、そして田中先生の情熱的で、厳密な聖書講解説教というものに、大きな尊敬を抱かれた。田中牧師の方もまた一方で、福田先生の学者としての力量を尊重なさり、何よりも長老としての、冷静で、そして毅然とした指導力、判断力というものを、深く尊敬しておられました。友情といってもいいでしょうか、あるいは、同志的な結合、お互いを教会を建て上げる同志として認め合っていた、そういう関係であったというわけですね。

太平洋戦争の間、日本のキリスト教会は「宗教団体法」という法律のもとに、一つにまとめられる、まとめあげられる、そういう、いわば不幸な事態を迎えました。プロテスタント教会には多くの教派があるのはご存知だと思うんですね。名古屋学院の場合には「メソジスト」という教派的伝統の流れをもっています。しかし戦時中には、国はすべての宗教を一つにまとめる、一つの組織にまとめ上げる、そういう、これは宗教だけではなくて、政党も、あるいは労働組合も、あるいは学者や文筆家たちも、いろんな人たちが、それぞれ一つの組織にまとめ上げられるということが起きたわけですね。

1938年、昭和13年には日中戦争（日中15年戦争）を遂行するために、「国家総動員法」という、国家のあらゆる機構・機関を総動員して、つまり全力で戦争を遂行するんだという、そういう法律が出来上がりました。その中で、宗教団体法という法律が作られたわけですね。宗教団体法というのは、日本のキリスト教諸派を一つに再編成するための法令です。いくつもの教派が、明治以来、日本で伝道し、教会を作ってきたわけですが、これが、1941年に宗教団体法の下で、「日本基督教団」という大きな教会にまとめられることになるわけです。

日本基督教団というのは、やはり政府の、国家の大きな圧力をもってですね、法律的な、法的な威力によって統合する。教会が一つずつ個別の教派に分かれて、自分の伝統を持っているという、そういう在り方というものを変えて、一つの教会に合流・合同しなければならない、というわけですね。目的はもちろん、戦争協力ということですね。プロテスタントも聖公会も、戦争協力のために一個の教団を作りなさい。合同に従わなければ

警察権力による厳しい監視が待ち受けている。そういう脅かしを背景にした法制がこの宗教団体法です。こうして日本基督教団の成立ということになったわけでありませぬ。この点では、もうこの日本のキリスト教会、全ての教会が、戦争協力については、誰も責任を逃れることはできないわけです。日本基督教会もそうですし、あるいは神港教会、田中剛二牧師、福田敬太郎長老といった、すべての人たちが一先ず、この日本基督教団の中に身を預けなければ、戦時下を過ごすことはできなかった。もしここからはみ出すことがありますと、当時は「治安維持法」という、最も恐ろしい、最高刑は死刑であるということなんですね、治安維持法による取り締まりに今度は入らなければならないということですね、そういう時代を過ごされたわけでありませぬ。

福田先生は、戦時下のこの日本基督教団の中に属していた時代の、信仰の在り方、あるいは神港教会の姿というものに、非常にいわば慙愧の念を抱いておられたということでしょう。田中牧師も同じでした。そのために、戦後、敗戦によって日本にもう一度、「信教の自由」あるいは「結社の自由」、そういったものが回復された時に、彼らはいち早く、日本基督教団から自立して、そしてもう一度、戦前の教会の在り方・教会の伝統というもの、あるいは教会の本質、そういったものを回復しようと、そういう努力を福田先生も田中先生も、協力しておやりになったわけでありませぬ。先生方の伝統回復、教会の本質を回復しようという努力が実を結ぶのが、1948年です。つまりそのところを目ざして、戦後3年間は非常にご苦労されたわけです。

日本基督教団の中から出て、本来の伝統を、そういう伝統というのは、長老教会の再建というか、本来の改革派教会、あるいはカルヴァンの流れを組む教会の編成をしなければならない、その使命感に燃えてらっしゃったわけですが、しかし結果的には、神港教会というのは、非常に大きな所帯でした。日本基督教会の間で、一二を争うような、大きな力を持った教会だったわけです。それだけに、田中牧師あるいは福田長老は、この神港教会を可能な限り一つにまとめ上げて、そして一つの教会として日本基督改革派教会に加入したいと、そういう願いをお持ちになりましたので、相当この3年間、紆余曲折があった。特に教会の学生たちの中には、なぜ神港教会は、すべてを投げ打ってでもただちに改革派教会に合流しないのか、という気持ちを抑えられない人々もいました。そういう学生や青年たちの激しい議論が起きた。

そういう中で、福田先生は、学生や青年たちを、諄々と説得して、そして教会から脱落する人がいないよう、一丸となって改革派教会に加入する、そのために君たちも忍耐してほしい、協力してほしいと呼びかけられた。結局、2年3年の間に、大きな不断の努力を重ねた末に、神港教会は改革派教会に加入することになったわけです。神港教会が加わるまでは、改革派教会は、本当に一握りの、3つか4つの小さな教会の集まりに過ぎなかったわけですが、神港教会は、人材面から見ても経済力から見ても、あるいは伝統という面から見ても、非常に大きな力を持った教会です。福田・田中、このコンビが、教会を本当にまとめ上げて、改革派教会に加入させた。その結果、日本基督改革派教会という教会が、ある程度安定感のある教会として、この戦後の70年間を歩むことができた、そう申し上げてもよいと思います。神港教会の改革派加入がたいへん見事な結果を生んだ、その非常に大きな要因はやはり、福田先生の長老としての、教会指導のいわば手腕、安定した判断力、そして多くの若い人たちの気持ちをしかりと受け止め、そして教会を一つにまとめ上げてゆかれた。その点で福田敬太郎先生の働きが、実に大きかったように思われるわけでありませぬ。

福田敬太郎を支えたキリスト教の類型

福田先生が、どういうキリスト教の背景・類型というものを身に着けていらしたか。そのことは恐らく、先生の経済学・商学の研究にも大きな意味を持ったと思うんですね。そのことを、ごく限られた背景を含めて少し駆け足で申し上げたいと思うのですが、福田先生は幼い頃から「日本基督教会」という、あるいは後には「日本基督改革派教会」という教会で長老としての道を歩まれたわけです。その日本基督教会という、この教会の輪郭を簡単に紹介しますが、1872年、明治5年に横浜に誕生した、日本最初のプロテスタント教会です。当時は、「横浜公会」と称しました。今では「横浜海岸教会」という、一種の観光名所にもなっております。そこから発した日本基督教会という教会自体は、全体として相当幅の広い教会、いろんなキリスト教理解、かなりの幅を持っているわけですが、その一番深いところにあるのは、やはり改革派的な教会の考え方というのが一番源流にある。たとえばこの横浜公会、1872年の教会の、最初の外国人の宣教師としてこられたのが、ジェームス・バラです。宣教師さんです。バラという先生は、アメリカ改革派教会の宣教師であって、身近なところだと、瀬戸に永泉教会という大変古い由緒ある教会が健在です。

永泉教会の会堂建築には、バラ宣教師が非常に大きな尽力をなされたわけですね。そういった改革派的な伝統が日本基督教会の源流をなしている。そういう風に理解をしていただければよろしいと思うんですね。改革派というのはですね、宗教改革の第二の波。第一はマルティン・ルターですね。1517年に、いわゆる「九十五か条」というものを掲げて当時のローマ教会の在り方に変革を迫った。今年が宗教改革500年ですね。ルターが始めたのがいわゆる宗教改革。それに対して、一世代、30年ほど遅れて始められた宗教改革のもう一つの、第二の波がつまり改革派ということですね。ですからプロテスタントの大きな源流は、この二つにあると、おおまかにそのように申し上げて良いですね。ルターが始めた教会というのは、ドイツ全土、それからドイツから主に、北欧の方に、ルター派教会というものを広げていくことになりました。ルターによる改革は、主としてヨーロッパ大陸が舞台となります。改革派の場合には、スイス、あるいはフランス、それからオランダ、そしてイングランド、スコットランドと、後には新大陸アメリカまで広がっていく非常に大きな流れを持つというのが、この改革派というキリスト教の歴史でありますね。

両方の特色を少し申し上げますと、ルター派教会というのは、当時のドイツ、いわゆる「神聖ローマ帝国」という大きな帝国は、「領邦君主」が教会に対する非常に大きな権限を持っていたわけですね。君主の宗教は領民の宗教であるという原則が行われたように、領邦君主によって教会もまた支配される、こういう関係があったのがルター派の一つの特色と言って良いんですね。それに対して改革派教会というのは、主にスイスを中心とした「都市」に展開します。改革派教会の舞台は都市でありました。この違い、「領邦」という舞台か、それとも「都市」を舞台とした改革であるかということで、彼らの教会の作り方、教会の成立の仕方というものに、大きな違いが生まれてくる、これがルター派と改革派の大きな特色というように申し上げて良いと思うんですね。そして、もちろん都市の場合も、初めはそれぞれの都市の「市議会」などがその教会の、たとえば牧師さんの任命権とか、あるいは懲戒権を持っています。教会運営に市議会がイニシアチブを持っていたわけですが、やがてこの市議会の権限というものを、教会独自の権能として回復してゆく。教会が独自に都市の中で、教会の自律的な形成・改革というものを行なっていく。牧師の任命も教会自身が行なっていく。こういうやり方に、次第に宗教改革の歴史が進んでゆく。それが改革派教会の非常に重要な特質になってゆくわけです。

この改革派教会の考え方の根底に、「神と人間の契約」というもの、キリスト教理解の中心に「契約」の理解を据えるというのが、非常に大きな特色と言えると思うんですね。「契約」、神と人間がまず契約の関係に結ばれる。そこから当然、横の広がり、人間と人間の間にも契約という社会的な構造が重視される。社会も神との契約の中で営まれる。こういう理解が、次第に発達していくわけなんですね。中心にあるのは、神の権威です。あるいは聖書の権威ですね。神と聖書の権威を軸にして、互いに契約関係の中でまず教会を形成し、国家を作り、社会を作る、ある意味で家庭もそのように契約関係の中で営まれる。こういう理解が次第に確立されていくわけですね。

その中で生まれるのはつまり、社会についても教会についても、自由なあるいは自発的な契約の共同体なんだ、そういう考え方で、社会の成り立ちを規定してゆくわけです。いわば近代国家というものは、自由な、自発的な契約関係の中で社会や国家というものが営まれるという考え方が主たるものであるわけですね。そのような考え方の基礎になったのが、いわゆる改革派教会の信仰であったり、神と人間についての考え方であったりするわけです。その場合も、ごく大まかに言えば、こうした「契約による共同体」というものが社会の本質であるとすれば、いわゆる全体主義的な国家とか、独裁的な政治体制とか、こういうものは契約社会にはなじまないですね。むしろ「法の支配」によって、社会や国家を作り上げていかなければならない、こういう理解が大勢を占めるということになるわけです。

宗教というのは、我々の一般的な考え方からいえば、非常に個人的なもので、私ごとである、宗教は人間の内面の問題であって、社会や家庭や国家、そういったものとは直接に関わりを持たないという理解があります。ここに神秘的主義的な傾向が加わると、内へ内へと自分を振り返っていくのが宗教の役割である、とこういう考え方が非常に強くなるわけです。つまり信仰というものはあくまでも「私ごと（私事）」である、あるいは「個人的な関心事」である、これが宗教というものについてのおおよその、我々の中でもそういった考え方が、相当しみこんでいるわけなんですね。

しかし改革派教会が、契約というものを中心に社会やあるいは国家というものを考える場合は、宗教は単なる私事ではなくなる。そうではなくて、キリスト者であっても、いやキリスト者だからこそ、この社会の事柄に参加をする、参加をすれば責任も生じるわけです。政治の問題についても、やはりそこに参加し、その中で自分自身の責任も果たす、こういう考え方がいわゆる改革派のものですね。そこから、改革派教会の歴史の中では、

国家に対する「抵抗権」などの理解も生じてくるわけですね。国家が理不尽な支配をしようとする場合は、教会もあるいはそこに生きているキリスト者個人も、あるいは市民も抵抗権を持つという、その抵抗権の思想もやはりこの改革派教会の契約思想という中から生まれてくる、というように考えられるわけですね。

このように概略を見ていきますと、やはりキリスト教というものにつきましても、いろいろな理解の広がりがあるということが分かるわけですね。これはもう当然と言えば当然でありまして、新約聖書を開いても、新約聖書の描いているキリスト教、これも決して画一的なものではないですね。信仰の理解に「多様性」が見られるわけです。キリスト教というと、宗教の在り方とその実践についても、なにかこう「球体」のようなものではなくて、いろいろな考え方、いろいろな伝統というものも持つ「多面体」、そして多様性をふくむ全体がキリスト教であるというようになるわけです。福田敬太郎先生の生きた信仰も、そうした多様性の中の一つを、ご自身のキリスト教信仰としてお選びになったという意味もあるわけです。

最後に少しだけ、福田敬太郎という方の学問が「信仰と文化」という文脈のなかでどのように位置づけられるか。私にはその全体像を描く準備も力ありませんが、福田先生が持ってらっしゃった「信仰と文化」の問題、「学問と信仰」のつながり方、あるいは「文化とキリスト教信仰」の在り方について、どういう考え方や可能性を想定できるか、を少しだけ見ておきたいと思うんですね。キリスト教と文化というもの、その関係を解き明かす上ではいろいろな考え方があると思うんですが、レジュメに書きましたように、「H.R. ニーバーの考え方を一例に挙げたいと思います。1951年の作ですが、『キリスト教と文化』。これはやはり、キリスト教と文化の関係を大変見事に一覽した、展望した、重要な著作だと思うんですが、その中に、これはまた、ゆっくりレジュメを見ていただくことにして、5つの類型をニーバーは考えました。

一つは、「文化に対するキリスト」(Christ against Culture)。文化と対抗する、文化と対立をするキリスト教、つまり文化というものを否定して、キリスト教信仰というもの打ち立てようという考え方、これが第一ですね。第二は、「文化のキリスト」(Christ of Culture)。つまり、文化とキリスト教の間には、根本的な和合・一致がある、いや融合することができる、文化とキリスト教が互いに融合し合うわけです。第三は、「文化の上にあるキリスト」(Christ above Culture)。つまり、キリスト教が文化の上に支配

的に立っている。これが、どういうタイプのキリスト教の理解であるか、皆さんもいくらか想像できるかもしれません。第四は、「矛盾におけるキリストと文化」(Christ and Culture in Paradox)。これは、文化とキリスト教というものが二元的に分離しているという考え方。ニーバーは、「ルター」という人を第四番目の類型の中に入れてあるわけですね。次に第五です。「文化の改造者あるいは改革者としてのキリスト」(Christ the Transformer of Culture)。キリスト教的な価値観によって、文化あるいは社会の改革をしていく、こういう考え方が第五番目のものですね。ニーバーは「カルヴァン」がこの第五番目のタイプに属する、と考えているわけです。

福田先生の学問とキリスト教の関係を考える場合に、やはりこのニーバーの第五の類型というものが参考になるのではないかと。勿論、私は福田先生の経済学や商学については全く何も知らない。その上で少々乱暴に申し上げるんですけども、やっぱりその経済学の研究などの背後に、先生独自のキリスト教理解といったものが流れていたのだらうと思えるわけですね。その点で、福田先生が、カルヴァンの流れに立つ日本基督教会、あるいは戦後の日本キリスト改革派教会の信仰に立ってらっしゃった、そのことに大きな意味があるというように思っているわけです。つまり、学問と信仰、あるいは大学と教会、あるいは経済社会と教会、その関係が福田敬太郎という人の中でどう繋がっているのか。学問が信仰を「無視」するとか、信仰に「敵対」する、そういう関係ではありません。逆に、学問が信仰を「支配」する、「抑圧」する、そういう関係でもないわけですね。

キリスト教という宗教は、やはり、一つの人生観あるいは一定の世界観を持っています。神が世界を、あるいは我々の人生をおつくりになった、そういう基本的な世界観・人生観がある。言葉を換えれば、人間や社会に関して、ある種の価値観というものがキリスト教の中には明確に流れているわけですね。一方で、経済、経済活動というものも、もちろん人間の営みであるわけですから、様々な価値観をもって人は経済行動というものをやっているわけですね。ですから、経済行動、あるいはその背後にある経済観、もっと遡って経済学と言うんでしょうか、そこにもある種の価値観、ある種の人生観というものが反映してくるのは当然だらうと思われるわけですね。

もちろん、必ずしもそれがキリスト教的な価値観である必要は無いわけです。他の宗教や哲学や道徳観から生まれてくる価値観、そういうのも重要であるわけです。いずれにしても、いかなる価値観を持たないままで、

経済行為とかあるいは経済学を営むということは、ほとんど不可能ではないかと、私は思うわけですね。もう少し言えば、学問というものを支える「倫理観」「エートス」というものがあるんじゃないか。そうした倫理性というものを失った場合に、経済学というものは、結局は、人間の欲望というものを無制限に容認する、あるいはそれを奨励することになりかねないですね。経済行動というものが、「増大」とか、「拡大」とか、「制限のない成長」とか、そういう道を実走っていく。あるいは、そのような制限のない経済活動を、学問によって補強する、裏付けするということも稀ではない。いま世界を支配している「グローバル資本主義」と呼ばれるもの、あらゆる規制を緩和して、すべてを人間の自由な経済活動に委ねてしまおうという考え方が世界を支配している。今は戦争さえ、いわば規制緩和されて、企業活動の一環として戦争行為というものが行われている。しかも、それを支える牽引している経済学者がノーベル賞を受けるなどということが、やっぱりあるわけなんですね。

福田先生の経済学・商学のご研究には、やっぱり信仰による価値観というものが働いたはずです。もちろん、これは信仰が学問を支配するようなものではない、と先ほど申し上げた通りですね。でも、学問研究の源流に、宗教的な価値観、ないしは倫理観が流れていただろう。

福田敬太郎先生の学問の底を流れていた宗教的なもの、それをひとまず「ピューリタン信仰」というように考えてみたいと思っています。ピューリタン、これも非常に広い多様な意味を持つ言葉で、今は、それを掘り下げる時間もなくて、私にはその力もないんですが、一言でいえば、ピューリタン運動というのは、イギリスの宗教改革運動を聖書を規範として徹底しようとして起こったものです。イギリスというのは、カトリックから分離して、プロテスタント改革をひとまず受け入れたものの、政治的な情勢が非常に複雑で、その改革はなかなか徹底しませんでした。より徹底した、ということ、より聖書を中心に、より神を中心とした教会を作らなきゃいけない、そういう運動が17世紀にイギリスで起きたわけです。一時的には、政治面でもイギリスで優位を占めるようになるんですが、結果的には王政復古があって弾圧も受け、歴史的な状況としてピューリタン運動はやはり挫折してしまうわけなんですね。

そうした中で、福田敬太郎先生は、ピューリタンの中でも「リチャード・バクスター」というピューリタンの偉大な指導者、この方に恐らく目を留めていらっしまったわけですね。バクスターは1615年から1691年、

17世紀の真っただ中に生きた人物なんですね。福田先生は、バクスターの膨大な著作の中から、信仰や実践に関する20何巻かの書物を、関西学院大学の図書館から借り出されて、それを非常に集中して読んでらっしまったということも私に聞いております。バクスターという人は、ピューリタン倫理・ピューリタンの信仰は、この社会や家庭の中でどういう役割を果たすのか、そのことについて非常に詳細な指導力を発揮した人物なんですね。特に、バクスターの実践的な生活への指導力、このことに恐らく先生は注目なされた。中でも、バクスターの名高い著作の中の『キリスト教指針』、これをどうも好まれたらいい。この本だけでも900ページを超えるような大著ですが、日本語ではその一部が翻訳されて読むことができるだけです。私も翻訳された部分しか読んでいないんですが、そのキリスト者の生活、あるいは彼らが作り出す社会の全体像というものを非常に細かく、しかも包括的に記述した、そういう書物が、この『キリスト教指針』という書物ですね。レジュメには、バクスターのいくつかの興味深い言葉を記してみました。「労働」について、あるいは「公共の福祉」について、あるいは「商取引」について、そういったものについて、いくつかの言葉を断片的にそこに抜き出しておりますが、これはどうぞご覧いただきたいと思います。いずれにしても、そういう、公共であるとか、他者の利益であるとか、法の支配、法の下での公正さ、そうしたものに、非常に大きな力点を置いた、バクスターの社会指導というのが、きわめて詳細に描かれているわけですね。

最後に、福田敬太郎先生が、名古屋学院大学の学長職、この招きを受けて初代学長になられた。改革派教会の長老としては、やはりこれは異例ともいえる決断であったと思えるんですね。しかし、実はバクスターという人自身が、非常に広い信仰理解を持った人でした。当時のヨーロッパのキリスト教界で、一つの懸案となっていたものが、「改革派」と「アルミニウス派」の論争でした。その論争が激しくて、そのために教会会議を招集しなければならないほどの大きなテーマであったわけなんですね。

バクスターは、ピューリタンの中でも非常に特異な立ち位置をとったようです。彼が、改革派の信仰と、それからアルミニウス派といわれる人たちとの、いわば和解のために、その両者を取りなすための運動を相当精力的に行なったことで有名な方なんですね。改革派とか、長老派というのは、「神の予定」、「神の選び」、そういったものを中心として、人が信仰によって救われるのも、神の主権、神の選びが中心だというのが、改革派教会の

信仰理解の大きな柱です。一方で、アルミニウスという方が公にした考え方というのは、改革派教会の信仰に対する異論です。つまり人間は、神の選び・予定を受けることもできるけれども、それを自由意思で拒むこともできる、という風に教えたのが、アルミニウス主義の考え方なんです。バクスターという人が、両者を、調停しようとしたのは、やはりこれは異色の発想であったんですね。

名古屋学院の基礎をすえられたメソジスト教会は、クライン宣教師を含めて、いわゆるアルミニウス主義の立場に立つ代表的な教会なんです。その源流には、ジョン・ウェスレーという偉大な人物がいるわけなんです。福田敬太郎先生が、メソジスト系の名古屋学院大学からの招聘をお受けになった時に、バクスターのことが念頭にあったかどうかは、これは今はもう誰にも分からないですね。先生は、はっきりした信仰・信念を持つ改革派教会の長老さんでした。でも、決して狭い心の方ではなかった、独善的に、自分の信仰だけが、自分の教会だけが正しい、そう主張するような方では全くありませんでした。そういう意味でも、バクスターの、あの周りから誤解を受けながら戦った、独自のピューリタン信仰にもとづく戦い、そのことと福田先生が名古屋学院大学の仕事をお受けになった、先生の身の処し方に、どこか共通する部分があるのではないかと想像している次第です。これは本当に、想像あるいは空想、ないし妄想であるかも知れないんですが、そういう風な可能性を漠然と考え、感じながら、つたないお話の準備をしてみました。これで終わらせていただきます。長くなりました。ご清聴ありがとうございます。

2017年12月1日（金）名古屋学院大学宗教講演会

「福田敬太郎 — 神に向き合った生涯」

小野 静雄

チャペルブックレット No.21

2018年5月1日発行

編集・発行 名古屋学院大学 宗教部
〒456-8612
名古屋市熱田区熱田西町1番25号
TEL 052-678-4096

印刷 有限会社 五十嵐印刷